

中澤正夫著

『ヒバクシャの心の傷を追って』

評者：野田 正彰

中澤正夫先生は一九七九年、群馬大学付属病院から東京の代々木病院へ転勤し、そこで何人かの原爆被爆者に会った。民医連・日本共産党の医療運動から造られてきた代々木病院は、東京における被爆者の治療、検診にも早くから取り組んでいた。だが身体医学的な治療、検診が行われていても、精神医学的な解明がされていないことを、彼は知る。

そこで小沼^{まき}十^{じゅう}穂^ほ・元広島大学精神科教授による一九五四年までの神経学的研究、アメリカの精神科医ロバート・リフトンの精神病理学的研究『死の内の生命－ヒロシマの生存者』（原著は一九六八年、翻訳書は一九七一年）、そして一橋大学の石田忠教授らによる社会学的研究の文献を読んでいった。そして被爆者の治療にたずさわって、ここ二〇年あまりに考えてきた被爆者の「心の傷」についてまとめたものが、本書である。

著者は、「被爆者の現存在がいかに危ういか……、という視点でいえばリフトンを超えるものは、日本の精神医学者には書けなかったのである。正直、寂しかったし悔しかった。自分を含め、不甲斐なかった。この本でその悔しさを取り返せたとは思っていない」と吐露している。

しかし、アメリカの精神医学者、日本の精神医学者と分けし、日本の精神医学者として「寂しかった」「悔しかった」「不甲斐なかった」という感情が、私には湧いてこない。リフトンはユダヤ人として、ナチス・ドイツのユダヤ人虐殺に強い関心を持ち、生き残ったユダヤ人についての研究も行っている。極限状況を生き残った者への深い分析はリフトン個人のものであり、原爆投下を正当化するアメリカの体制派から出てきたものではない。リフトンにあって、日本およびアメリカの精神医学者のほとんどの人になかったものは何か、中澤さんは指摘されるのだろうか。私は大きな期待をもって、本書を開いた。

記憶と自責感

『ヒバクシャの心の傷を追って』と題する本書は、まず「心の傷」を「記憶の障害」、「感情麻痺」、「引き戻らされ体験」から分析していく。その上で、近年の問題として、被爆者から子供への体験伝達、および老いた被爆者から子供への体験伝達、および老いた被爆者がもう一度、ここまで生き残ったことの意味を問う章へ続いている。

まず、記憶の障害について。被爆者の多くは、被爆した瞬間とその直後について鮮明に語るのに、それから後の数時間、数日について「記憶欠損」がある。逆に、見たものを詳細に記憶している人もいる。また、同じく被爆した家族が何度となく語りあって作っていった「集合記憶」に影響され、それらを自分の記憶として取り込んでいるものもある。

著者はこの記憶欠損に注目し、それを「見ても見えない」と捉える。「既成の概念にないできごと」だったので、見ても見えなかった。だが記憶中枢には多少残っており、いずれも辛い体験であり、思い出すごとに「自責感」をともしない、「他人を見捨てた記憶の強化・再現」に

つながる、という。

しかしこれはある一面と一面を飛び飛びにつないでいった説明であり、「見えても見えない」のかどうか、分からない。日常生活でも、見たもののほとんどは記憶されていない。概念化されやすく、記憶の地図におさまった僅かなものが、しまい込まれるだけである。そこから想起されるのであろうが、よく想起されるものと、ほとんど想起されないものがある。想起されたものは、さらに想起されやすい形をとっていく。しかも想起されたものは、記憶されなかった空白によっても変形されている。そして抑圧された体験とは、一応、記憶の地図に整理されたものの、想起をさせないように抑え込まれたものかもしれない。

いずれにせよ、記憶の障害は他人を見捨てた記憶につながっている、と必ずしも言えないのではないか。

次の第三章、「見捨てた体験」へ移り、年月とともに個人的な見捨てた体験が強化されていくのは、被爆者が生きていくために自責感の根柢となる自分だけの体験が必要であるからと述べている。

しかし、自責感をあまり持たない人もいる。その自責感も強弱がある。残念ながら、本書では対比しての分析は書かれていない。

なお、少なからぬ被爆者（二割ほどか）が、「原爆投下は許せないが、自分たちの被爆が終戦を早めた面もある」と静かに告白しているのを、私は知っている。それは、自分の被爆を歴史の中で意味づけようとする態度である。その底には、あの戦争に加担していた自分自身を認める反省がある。自責感という言葉をあえて使えば、それは知的な自責感ともいえる。

ひるがえって、自責感を語る人のほとんどが、日本軍・政府・企業・個人が行った凄まじい加害について、関心をもたないのは、何故だろう。

自責感とは自分だけの体験についての自責であり、負の感情ではあるが、反復想起することによって、現在と過去の自分をつないでいる。だが私たちが生きている日本社会は、現在と過去を政治的、恣意的に断絶し、侵略戦争について考えることを許さない圧力がかかっている。そのことが被爆者の自責感、ひいては被爆の記憶全体を歪めている面もありはしないか。

概念の混乱

第四章は「感情麻痺」についての章である。そこでの結論は、「感情麻痺がおこった原因は容易に判断できる。原爆でひきおこされた災害は不意打ちであり、だれも想像できない残酷さと規模であったため、通常の感情・思考・判断が停止状態におちいったのである」という。これは同語反復ではないのか。感情麻痺と感情の停止状態と、どのように違うのか。また、原爆だけが「不意打ちであり、だれも想像できない残酷さと規模であった」とは言えないし、そのために原爆だけに感情麻痺が見られたとも言えない。

第五章の「引き戻され体験」では、なんらかの感覚刺激に続く、いわゆるフラッシュバックだけでなく、「しかるべき年齢を待たずに逝く人びとが、身近に次々と続くので、たえずフラッシュバックをおこしている」と述べている。これは放射能被爆という持続する障害をかかえ、社会的な負荷のなかで生きる被爆者の、「同一運命の意識」とでも言えるものであろう。それを極めて個人的で、状況に左右されているフラッシュバックと連続して考える視点は、興味深い。

これらの章を通して、本書の結論は次のようにまとめられている。

《現在「心の被害」の中核にあるのは、史上最悪の外傷記憶によるPTSDである。しかも、フラッシュバックをおこすキッカケがず

っと続いているという最悪のものである。「続く」のは、原爆被害の中核が放射能被害だからである。放射能による後障害やその恐れが、次々と、新たな心的外傷を形成するからである。「放射能が一生追いかけてくる」のである。そこに原子爆弾の悪魔性がある。》

このように著者は原爆被害は放射能障害を持続させるので、他のいかなる外傷体験を超えたものであると結んでいる。だが、それは「心の傷」の分析なのだろうか。原爆の維持についてふれているのであって、著者が追求すると述べ、本の題名となっている被爆者の「心の傷」の分析なのだろうか。最初から最後まで、「心の傷」、「心の被害」、「外傷記憶」、「PTSD」、「フラッシュバック」がどのように定義されているのか、それぞれの言葉の違いが曖昧なまま文章が流れている。

例えば、「心の被害」と「外傷記憶」はどう違うのか。精神分析で一般に使われてきた「外傷記憶」と、ここで使われている「外傷記憶」とはどのように違うのか。「PTSD」は、自分が死ぬか、他人が死ぬかもしれない「外傷的な出来事」を体験し、しかもその出来事に対して強い無力感に打ちのめされたときに起きる精神障害と定義されているが、著者の使う「外傷記憶」は「外傷的な出来事の体験」（外傷体験）とどのように違うのか、どれもよく分からない。

親子関係と老い

「心の傷」なるものを追った章は、以上であるが、後の二章、親子関係と被爆者の老いについて書かれた章は、理解しやすい。

被爆者とその子供（本書では、「被爆二世」と呼んでいる）との間で、被爆体験はどのよう

に伝えられているのか、あるいは伝えられていないのか。そこには被爆者とその家族に、この社会はどのような負荷をかけてきたのか、被爆者はどのような家族関係を作ってきたのか、重要な問題が含まれている。

さらに、被爆者の老いについても十分に配慮されなければならない。老いて心身ともに衰退していくにつれ、また家族を喪い孤独になるにつれ、外傷体験に戻っていく人は少なくないからである。

ただし本書では、被爆者の老いの問題が、石田忠氏の「反原爆の思想」の再認で終わっている。「被爆者は絶望と虚無へ漂流せしめる力と、これに逆らって己の再生を遂げようとする力との二つの拮抗を経験する」のであり、この「漂流」から「抵抗」への飛躍が「反原爆の思想」である、と石田氏は言ってきた。だが、ここにも他の被害を知らないで主張する、被爆の特別視が見られる。東京大空襲の被災者も、残虐に殺され続けた中国人の生存者にも、同じ絶望と抵抗の心理力動はある。視野狭窄によって、むしろ被爆者の葛藤と生き方の理解が一面化されている、と私は思ってきた。これは石田氏ら一橋大学グループの限界であるが、著者もその流れに乗っているようだ。

東京に住む被爆者たちに二〇数年にわたって寄り添ってこられた中澤先生を、私は尊敬する。それ故に、その永い年月の対話のなかから、深く考えたものを提示してほしかった。これが本書を読んでの願いである。

（中澤正夫著『ヒバクシャの心の傷を追って』岩波書店、2007年7月刊、xiv+181+19頁、定価2000円+税）

（のだ・まさあき 関西学院大学教授・学長室）